

北海道医療新聞

10月7日

2024年・2530号

毎週月曜日発行

年間購読料24,200円

(前納/税込)

発行所

株式会社 北海道医療新聞社

〒060-0042

札幌市中央区大通西6丁目

(北海道医師会館)

TEL011(221)7777

www.medim.co.jp

高橋 函館 早期退院支援を強化 リハビリ室拡充でニーズ対応

函館市の高橋病院(高橋肇理事長・119床)は時任町1番2号に移転新築し、オープンした。回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟を柱に、リハビリ室拡充に加え、最新機器導入で検査や診療体制を強化して早期退院支援を図るほか、コミュニティスペースを新設し、地域連携と在宅医療を推進していく。

旧病院建物の1.3倍の広さとなる新病院は、RC造地上4階建て、延べ約1万6700平方メートル。総病床数は119床を維持。地域包括ケア病棟は20床減らして39床とした。一方、回復期リハビリテーション病棟は60床から80床に増やした。標榜科

目は、9科目に、泌尿器科を加えた。1階には外来診察室や訪問診療室、総合支援センターのほか、CTや骨密度検査・X線透視室など各種検査室を集約。玄関横には広々とした1600平方メートルのコミュニティスペースを設置し、

地域住民や近隣の学生、患者家族が自由に集える交流の場として活用する。入院患者が住民と関わることで、在宅支援にもつなげていく考え。2階は回復期リハビリ病棟で、南北に40床ずつ病室を配置。中央には開放感溢れる460平方メートルの全面ガラス張りのリハビリテーション室となり、VR機器やドライビングシミュレーターのほか、道南初の天井走行型

免荷レールなど、最新機器を充実させた。隣接する食堂からは患者家族が訓練を見学できるレイアウトとなっている。福澤高廣事務部長は、「早期に在宅復帰するためには患者家族の参加は不可欠。患者の在宅生活がイメージできるような患者がでることで、していることを家族と情報共有し、早期退院を目指す。また、リハビリ室は春には満開の桜が展望



新病院には、クラスター型の設計を採用。外観もユニークな作り

できる。ロケーションの良さからも患者のリハビリテーションに対するモチベーション向上につながる」と話す。

3階南側は地ケア病棟、北側は介護医療院(60床)で、4階は医局や事務室、会議室3室のほか、広いスタッフ専用のラウンジは多職種が交流できるようカフェスタイル。

2、3階病棟は中央のスタッフトレーニングを囲んで病室が点在するクラスター型を採用。広い面積を確保し、スタッフの動線短縮による作業効率アップに加え、患者とスタッフとの距離も近くなった。

各病棟3部屋ずつ計12部屋のカンファレンス室を設けたほか、最新式の機械浴、感染症対応の高換気ゾーンングエリアも用意。福澤事務部長は「地域と病院、患者とスタッフが空間を共有し、開かれた病院を目指したい」と力を込める。